

子どものスポーツと遊び

山 根 耕 平

はじめに

子どもの生活世界が痩せ衰えているといわれて久しい。ファミコン・テレビ・マンガという三大遊びに象徴される屋内での「孤立化した遊び¹⁾」、他方、ますます低年齢化する塾通い。子どもの生活はまぎれもなく歪んでいる。心と身体総合的な発達という観点からみても、バランスを失っている。

近年、こうした歪みの反動からか、子どもの「スポーツ」が盛んである。それは、急速に多様化、低年齢化しつつある。その大半は、大人のスポーツである。野球、バレーボール、サッカー、水泳、剣道、テニス、ゴルフ、スキー、などなど。それも幼児期のものからが少なくない。

子どものスポーツは、子どもの生活の歪みを是正し、豊かにし、心身の発達のバランスを回復する特効薬になりうるだろうか。それは、子どもたちの日々の生活の中で生きてはたらく活力の源泉になりうるだろうか。はっきりいって答えはノンである。今の子どものスポーツにみられるように、大人主導の管理スポーツからは、子どもの健やかな発達は多くを期待できない。

子どもの「問題」を考える際、「生涯発達」という長い視野でそれを捉えることが大切である。子どもたちが自らこれからの長い人生をよりよく、よりたくましく生きていく、そのための基礎・基本的な能力を培うことこそが幼少期の課題であるからである。目先の見栄えのすることにとらわれ、一方的に子どもに知識を詰め込んだり、技能の習得を課したりすることは、長い視野で見れば、適切なことではない。

このような認識にたって、本稿では、子どものスポーツに焦点を当て、その問題点を指摘する。そして、これからのスポーツの在りようと遊びとの有機的な連関について考察する。あわせて、子どもの自然と「向かい合い」という視

点からも、子どものスポーツと遊びの問題を捉え直してみたい。

1. 子どものスポーツ、今

ひと昔まえなら、近くの広場や空き地で三角ベースで野球をしている風景がよく見られた。低学年であまりうまくない子どもにはレフトレフト（レフトのうしろを守る）をさせたり、人数の少ないときは「透明ランナー」を作ったりのと、工夫してやっていた。こうした野球は、スポーツというよりも、ルールも状況に応じて変わる「遊び」として成立していた、といえる。

今のスポーツ野球に目を向けてみよう。そろいのユニホームを着て、スパイクをはき、専用のバッグを持っている。毎日の早朝練習。それも、大人の指導のもとできちんとしたスケジュールに従って計画的な練習をする。地区単位の試合も、全国大会もある。高校生や大学生顔負けである。そこには「遊び」のかけらもない。もう下手であることは許されないし、都合次第でルールを変えることなど論外である。

野球に限らず、子どもをとりまくスポーツの状況は驚くほど画一的である。大人主導、それも個人的なものではなく、しっかりした組織的なものである。野球、サッカー、バレーなど全国大会の組織をもっているし、国際レベルの競技会も増えている。また、それらのスポーツがほとんど技能の優劣、勝敗を競う競技スポーツであるのも、その特徴である。今、子どものスポーツは、子どもの生活世界に自然発生的に生起する「遊び」ではなく、組織的な「訓練」としての本格的スポーツ（大人・子どもの区別はない）である。

今の子どもスポーツのもう一つの特徴は、その低年齢化である。幼稚園でもスイミングやサッカーなどを正規のカリキュラムに組んでいるところも多い。また、個人的に早くから専門的なトレーニングを受けている子どももいる。スイミングがもっとも一般的で、季節に関係なく一年中泳ぐ。小学校ではエースとなるべく投球練習をし、変化球を投げさせる。さすがに、「野球ひじ」が問題になってからは、禁止するコーチが多くなったといわれるが、大人並みのトレーニングに変わりはない。

この低年齢化が、子どものスポーツの「専門化」と平行して進んでいるのがこの問題性をいっそう大きくしている。スイミングならスイミングだけ、野球なら野球だけ、サッカーならサッカーだけを小さいときからトレーニングする。一つのスポーツだけの専門的な指導を受けるのである。短い射程で考えれば、その方が確かに効果的であろう。週に2回するより毎日する方が上手くなるのは当然だ。しかし、このことが、子どもの身体にさまざまな歪みをもたらしているのも確かなのである。「サッカーだけ少年」の「サッカー足」、「野球だけ少年」の「野球ひじ」、「スイミングだけ少年」の「水泳肩」などである。身体面に限らない。小さいときからの大人主導の管理的な訓練や指導、また、競争、ストレスなどが原因の「バーンアウト症候群」もある。スポーツがすっかり「いやになってしまう」子どもたちである。また、有能なためにかえって優越感やプライドばかり強くなる子どももいる。

ところで、外で身体を思いっきり動かして遊ぶ機会が少なくなったので、せめてスポーツでもさせてと素朴に考えている親も多いだろう。また、将来、スポーツ選手にと考えている親やコーチも少なくないだろう。いずれにしても、ここまできた「子どものスポーツ」については、もう一度「なんのための、だれのための」スポーツなのか、原点に帰って考えることが、ぜひとも必要である。このスポーツの見直しのためには、今のスポーツ指導の考え方について、その問題点をきちんと押さえておくことが大切だ。

2. スポーツ指導観の問題点

(1) 先にも指摘したように、大人のスポーツがそのまま子どものスポーツになっているために、子どものスポーツ指導で子どもの心身の発達特性が考慮されていない場合が多い。子どもはいわゆる「小さな大人」ではない。たしかに「未成熟」であるが、この「未成熟」は、デューイのいうように、「発達する²⁾能力」を意味している。子ども存在の特性は、まさに「発達しつつある存在」だということにある。この点を考えないで、大人のスポーツの視点からトレーニング中心のスポーツをやらせることから、先に挙げたような心身両面での

発達障害が生じる。

(2) 勝利至上主義と、そこから生まれる精神主義や根性主義にもとづく指導が行われるのも問題である。勝つための、技能向上のための訓練・鍛練を課す。計画的で過酷な練習が毎日行われる。武藤氏によれば³⁾、「日本でサッカー全国大会に出場するためには、1日2時間、週6日という練習が最低条件になっている。」さらに「日本の少年サッカーの練習といえば、大学や社会人サッカーチームの縮小版さながらで、じつに整然とした基本練習と、本格的な体力トレーニングなどが主体」となっている。その際、強調されるのは子どもの頑張り、根性である。子どもにとっては、この練習にいかにか頑張ってついていか、それが至上命題である。「ついていけない」子どもは「敗者」である。毎日の激しい練習に耐え、勝利に涙する子どもの姿は一見、ほほえましく、感動的ですからある。しかし、子どもの在りようを、より総合的に、より長い射程で捉えたとき、はたしてそれは子どもの望ましい在りようだろうか。

根性主義の日本の少年サッカーに比べ、サッカー王国といわれるドイツ（旧西ドイツ）では、「小学校レベルのクラブサッカーでは、週に2～3回、1日1時間30分ぐらいで、それも子どもの興味をそそるように、ゲーム中心の練習だそうです。本格的フォームンづくりやむずかしい技術練習が中心ではなく、子どもの自由な意志や興味を大切に、ゲームを楽しみながら行うやり方⁴⁾」だといわれる。おおいに学びたいスポーツ指導の在り方である。スイミングにしても野球にしても、事情は同じである。訓練中心の子どもにたえず頑張りを要求するスポーツ指導は根本から考え直す必要がある。

(3) 「鍛えすぎ」の次は、大人の「かかわりすぎ・教えすぎ」の問題がある。子どもたちが自分たちで考えたり、工夫したり、判断したりする必要性を認めない指導である。1から10まで手とり足とり「教える」。それもかなり専門的にである。野球で言えば、ボールの握り方、投げ方、バットの握り方、構え方、ゴロやフライの捕り方、ベースランニングの方法などなど。基本的なことからかなり高度な技術も含まれる。スポーツにおいて「基礎・基本」の大切なことは理解できるが、だからといって、一律に「教え込め」ばよい、という

ものでもない。「基礎・基本」だからこそ、一人ひとりの子どもがいかに関わりなりにそれを工夫し、習得していくか、その過程が重要である。とくに、子どもの場合、その過程を「楽しむ」ことが大切だ。大人の「かかわりすぎ・教えすぎ」は、子ども自身スポーツを楽しむ「遊び」の要素を奪ってしまう。

(4) このような勝利をめざしての訓練スポーツの問題点は、子どもが自ら主人公となって活動を楽しむという、つまり「遊び」としてのスポーツからの遊離という問題に収斂する。今の子どもスポーツは、子どもの「生活世界」の「自由な空間」に成立するものではない。近所の自然発生的な仲間集団での遊びやスポーツを通して身につけた「身体の動き」や「仲間との付き合い方」など、少年スポーツからは得られない。だから、このようなスポーツは子どもの「生活世界」を豊かにし、遊びを補うものとはなりえないだろう。

以上、4項目にわたって、今の子どもスポーツ指導の問題点を指摘したが、これからのスポーツ指導の在り方については、これらの問題点の中にその解答をみつけることができよう。それは子どもの発達特性を押さえ、そしてなにより、子どもの生活の中で「遊び」と有機的に連関していなければならない。

3. これからのスポーツ指導 ——スポーツの遊び化——

「はじめに」で述べたように、子どもの生活世界は3極化している。ファミコン・テレビ・マンガなどの遊びと塾とスポーツである。しかし、3極化しているといっても、スポーツをしている子どもがほかの2つのことを免れているわけではない。たとえば、いま、学校以外のスポーツ集団でスポーツ指導を受けている子どもは、4年生以上で50%近くにのぼるといわれているが、その子どもたちもファミコン遊びもするし塾にも通っているのである。言い換えれば、遊びと塾とは今の子どもの基本行動なのである。それだけスポーツ少年の負担は大きいといえる。

しかし、身体を動かす、広い意味での運動が、今の子どもたちにとって必要であるという認識自体は間違っていない。成長期の子どもにとって、「運動する」ことは大切である。子ども自らイニシアティブをとって楽しく運動するこ

とは、なおいっそう重要である。「身体のイニシアティブ」、「活動する主体としての身体」を復権させることは、今日的な課題である。今のスポーツ指導の問題点の一つは、「かぎりない身体の受動性」にある。遊びの中でも、スポーツの中でも、この主体としての身体の復権が果たされるなら、子どもの生活に明るい展望が開けてこよう。このような認識から、これからの子どものスポーツの在りようを考えてみよう。

(1) 「子ども子どもによる子どものためのスポーツを」

これは、武藤氏の提案である。武藤氏によれば、⁶⁾「子どもの」というのは、「子どもの心身の成長・発達に即して」ということである。自分の経験だけに頼って指導するのではなく、科学的な指導が必要だということである。「子どもによる」とは、「子ども自身の発想や興味、好み、ルール」にもとづいたものという意味である。具体的にいえば、「三角ベース」や「透明ランナー」のルールは、野球というボールゲームを子どもの「やり方」で遊びとして行っているものである。武藤氏の言うように、そこには「子どもでなければ思いつかないような、おおらかでたくましく自由な発想とやり方」がある。これは、おおらかなスポーツ観、スポーツを自由な活動・運動として捉える視点である。次に、「子どものための」とは、「大人の利益や満足のためのスポーツ」であってはならない、ということである。子どもの発達と教育の観点からいって、すぐれたスポーツ選手にするとか営利目的とかにスポーツを行うことは、基本的に間違っている。現実には、企業の人材育成とか、オリンピック選手育成とかを念頭に、国家的な支援体制のもとで子どものスポーツに力を入れるべきだとする考え方もある。子どもスポーツにたいする間違った考え方である。以下、武藤氏と重なるところもあるが、子どものスポーツ指導の留意点を私なりに挙げておく。

(2) スポーツの「遊び化」を ——子どものイニシアティブを生かす——

「生涯発達」の観点からいって、子どものスポーツ活動においては、子どものイニシアティブを生かすこと、言い換えれば、子どもの意志、発想を尊重することが大切である。上達の面からいえば、少々、遅いことや我流になることな

どが心配されるかもしれない。だが、長い目でみて、それが東洋氏のいう「つぶれにくいイニシアティブ⁷⁾」を育てるのである。友達と一緒に自分たちの興味・関心のおもむくままに楽しく活動できれば、それでよい。そこでは、必ずかれらなりの発想、創意工夫があり、また、それゆえに対立や緊張の関係も生まれようが、そのことが、かれらの活動をいっそうダイナミックなものにするだろう。スポーツも自ずと「子どものもの」になるだろう。いわば、「遊び化」するだろう。自分たちの「やり方」でスポーツや遊びのルールをいろいろに変えたり作ったりすることで、活動をいっそう充実させ楽しむ。このことが大切である。

子ども期のスポーツは、身体を動かすことをいろいろな仕方で楽しみ、心を自由にはばたかす活動である。要するに、活動そのものを楽しむ「遊び」と深くかかわるものである。大田堯氏のいうように「人間の子どものための遊びの特質は、何かのためではなく、それ自身を楽しむ、その行動自体の中に生きるということ⁸⁾」だからである。私はここでスポーツの「遊び化」を強く主張したい。スポーツを駄目だというのではない。大人主導のスポーツではなく、もっと子どもたちが自由に楽しめるように配慮すべきだといっているのである。長い目でみれば、武藤氏のいうように「たのしくおおらかな子どものスポーツ⁹⁾」が子どもを全体として育てるのである。

(3) たくさんの種類のスポーツを経験させる

スポーツを楽しむ、身体のいろいろな動きを楽しむということからいえば、子どもたちにできるだけたくさんの種類のスポーツを経験させるということも大切である。早いもの勝ちという発想で、幼少期から1つのスポーツだけをさせることには問題が多い。野球なら野球だけ、バレーならバレーだけ、サッカーならサッカーだけを、明けても暮れてもやるのが、大人、子どもを問わず、日本のスポーツ指導の特徴である。小学生や中学生が1つのスポーツの「練習づけ」の毎日をおくるのは、どう考えても異常である。「野球だけ少年」、「サッカーだけ少年」は避けたいものだ。中嶋氏によれば、ドイツ(旧西ドイツ)¹⁰⁾では、陸上競技、器機体操、体操、水泳、サッカー、テニスなどをまんべんな

く楽しみながら行わせているということである。「バーンアウト症候群」を避けるための心理的な配慮でもある。複数のスポーツを自由に組み合わせたり、季節によってスポーツを変えたりして、また、T・P・Oに合わせてルールを工夫したりして、スポーツを楽しむことが大切である。子どものさまざまな身体的能力を育てることからみても、その方が有効であろう。ここでも、子どもの側のイニシアティブを尊重することは、基本的な要因である。

(4) 子どもの生活世界全体のバランスを考える

スポーツ少年は、22パーセントが「ほとんど毎日」練習し、38パーセントが「3日以上」練習するといわれている¹¹⁾。ほとんど「練習づけ」の状態といってもよい。子どもの生活世界全体のバランスの点からも、子どもたちのスポーツをする日数や時間を考える必要がある。山本氏によれば、遊びの主流は今やスポーツである。「子どもの遊び空間に占めるスポーツ系統の遊びは、行為者比率（スポーツに参加している子どもの割合）で約40パーセント、平均時間で約50パーセントを占めていて、遊の中心的存在であり、この傾向はますます強くなっている¹²⁾。」学校や塾とのバランスを考えなければならない。とくに、その際大切なのは、子どもたちが自分の発想や工夫を生かせる時間を生活の中に保障することである。学校の勉強に時間的にも心理的にも追われ、塾の勉強にも忙しい毎日から子どもを解放するためにも、子どもたち一人ひとりが主人公になって活動できる時間を定着させることを考えよう。子どものスポーツを適正化すれば（遊び化すれば）、そのような活動として子どもの生活の中に正しく位置づけられよう。

(5) 大人の責任は環境づくり

大人は直接的な指導はなるべくしないで、子どもの活動の環境づくり、援助役に徹することが大切である。武藤氏の指摘にもあったように、子どものスポーツでは大人の「かかわりすぎ・教えすぎ」に問題が多い、武藤氏は述べている。「最初は“子どもを丈夫に育てたい”と願っていた親も、“スポーツマンらしくたくましく”と思っていた指導者も、いつのまにか“何のために”スポーツをやるのか忘れ、ただひたすら勝つために無理な練習を強いたり、心にプレ

ッシャーをかけてしまっていることは否定できません。¹³⁾ 子どものスポーツであることを忘れて、「一流選手に必要と思われる技術をすべて教え込む」という愚を犯しているのである。わたしたち大人のすべきことは、そのような「かかわり方」ではなく、子どもたちがもっと自由に、スポーツ・遊びを楽しめる環境をつくることである。子どもをとりまく環境（スポーツ・遊びのための）はあまりに貧しすぎる。どこにでもある公園も、スポーツをするにせよ（ほとんどが禁じられている）、遊びをするにせよ、不適切なものばかり。発想を変えて、子どものスポーツ・遊び環境を整えることは大人の責任である。¹⁴⁾ それはすぐれて社会的な焦眉の課題である。

結論的にいえば、子どものスポーツの見直しは、「遊び」の視点からアプローチしなければならない、ということである。言い古されたことであるが、子どもは遊びを通して成長する。ヴィゴツキー的な言い方をすれば、遊びは「発達のすべての傾向を凝縮した形」¹⁵⁾を含み、いわゆる「発達の最近接領域」を意味している。それは、大田氏のいうように¹⁶⁾「ヒトが人となる要件」である。子どもたちは遊びの中で「人としての生活の業や知恵の基礎を会得していく」。また、その中で「自我の深みから湧き出る価値感情をわかち合ったり、きしみ合わせたり」もする。その意味で、わたしたちは、遊びを「人間性の開花」の「基本的要因」として、はじめに理解する必要がある。それを大人の共通認識とすべきだ。

さて、これまでスポーツの適切性、その適正化を考えてきた。子どもたちがその発達特性に合ったスポーツをすることの必要性を説いてきた。スポーツが子どもの生活世界において、子どもサイドの適切な地位を占めるべきだと訴えてきた。

しかし、それだけでは十分ではない。わたしたちは、自然との「向かい合い」という視点からも、子どものスポーツ・遊びの問題にアプローチする必要がある。「自然の意味」の問い直しは、今日子ども・大人にぜひとも必要なことである。

4. 子どもと自然との「向かい合い」

日本ほど自然に恵まれている国は少ない。日本の伝統文化は「自然」と深い
かかわりをもっている。マンションの小さなベランダでも花や木が大事に育て
られている。「自然」のある生活はだれしもの夢である。

しかし、今、子どもたちの生活世界から「自然」が急速に消えつつある。そ
れは、戸外で「群れ」をなして遊んでいた子どもたちが、塾やスポーツに追わ
れ、ファミコンやテレビなど屋内での遊びに夢中になりだした時期と軌を一に
している。都会の環境の劣悪さもさることながら、高度技術化・情報化社会の
影響が大きい。もっと直接的に言えば、こうした社会の商業主義（子どもをタ
ーゲットにしたもの）の影響が大きい。事態はどこでも画一的である。自然に
恵まれた田舎の子どもたちも、都会の子どもに劣らず、ファミコン・テレビの
申し子で、山や川で遊んでいる子どもは皆無といってよい。

では、子どものこうした「自然ばなれ」は、どういう点で問題なのであろう
か。

1つは、「心の拠り所」としての自然の意味を失うことである。「内なる自
然」の喪失と言い換えてもよい。子どもたちがファミコンなどの機械相手に、
また、管理スポーツにエネルギーを費やし、自然と「向かい合う」ことをしな
くなったとき、人間的な心情、とりわけ「感性」の萎縮が危惧される。「活動す
る主体としての身体」と、自然との直接的な「向かい合い」から人間的感性が
磨かれ深められるとすれば、自然の喪失のもつ意味・問題性はことのほか大き
い。子どもと自然との「向かい合い」について述べるまえに、「身体性」につ
いて少し言及しておく必要がある。

スポーツにしる遊びにしる、「身体性」——身体の在り様とはたらき——につ
いてもっと深い捉え直しが必要だ。わたしたちは、自分の身体を、手、足、目、
頭、肩、腕とかの各部の総体として考え、身体の発達はそれらの各部を鍛えれ
ばよい、というふうに考えがちである。しかし、中村雄二郎氏のいうように、
わたしたちは実は「自分の身体を生きている。わたしたちは身体を持つのでは
なく、身体を主体となし、身体そのものとして生きている。」¹⁷⁾そして「身体そ

のものとして生きている」とは、見る、聴く、味わう、嗅ぐ、触れるなどの感覚を駆使してものを知覚し、考え、行動する、ということである。この意味では、わたしたちの生と発達、考えられるよりはるかに「知覚的」、「体性感覚的」なのである。

このように、発達を「体性感覚的」と規定すれば、自然との「向かい合い」は発達の重要な要件となる。そこでは、子ども（人）は「自分で」、「自分の身体で」じかに自然と向かい合わなければならないからである。そして、中村氏の説明に従えば、¹⁸⁾「自分で」とは、「他律的に、あるいは受動的にではなく、自分の意志で、あるいは能動的に」ということである。次に、「自分の身体で」というのは、「抽象的あるいは観念的にではなく、身を以て、身体をそなえた主体として」ということである。まことに適切な着眼と説明である。このいわば「活動する主体としての身体」が、ときには親和的に、ときにはきびしく、自然と「向かい合う」ことが、子どもの発達——それは「生きること」と言いかえたほうがいっそう適切だろう——の最適の在りようである。そして、この「親和的に」と「きびしく」というのが、自然との「向かい合い」の様態なのである。

自然と「親和的に」向かい合うとは、平易にいえば、日々の生活の中で「自然と親しむ」ということである。それは、子どもたちの感性と自然との直接のコミュニケーションを意味する。子どもの心をよりしなやかでおおらかなものとするだろう。河合氏は実際的な方法として「歩山」を提案している。¹⁹⁾とくに杉の山ではなく、雑木林を歩く楽しさを説いている。小さな庭園などに感性を閉じ込めないで、「大自然に解き放つ」ことを勧めている。それは、「密室から出て、物との対話から離れ、いのちのあるものとの対話の日常を楽しむようにしないと、感性は潤いを失って無機的になり、やがて萎縮してしまうのを恐れる」²⁰⁾からである。もっともな指摘である。

わたしのいう自然との「向かい合い」には、「親しむ」ということのほかに、自然と「きびしく対峙する」という意味もある。子どもは、自然との「向かい合い」の中で「耐える」ことも学ぶのである。そこで「主体としての身体」

を能動的に活動させ続けることは、子どもにきびしさを、耐えることを求める。自分の足で、イバラやトゲのある山道を歩いたり、そこを遊び場にするためには、それなりに「耐える」ことが必要である。寒いとか暑いとかいうこともある。ほんとうに勇気のいることも少なくない。しかし、そういう苦しさは、いわば、自然の「くびき」であって、大人が課した人為的なものではない。子どもたちが心はずませ、思いっきり活動するという楽しさの過程で解消される苦しさである。

このように、子どもと自然との「向かい合い」は、「感性」と「耐えること」という二つのキーワードで説明することができるが、このことによって、それが、すぐれて今日的な課題であること、さらに、教育的、社会的課題であることが理解される。この課題にどのように取り組むのか。

兵庫県では、昨年度より小学校で5泊6日の「自然学校」がはじまった。自然との「向かい合い」の中で、級友たちと寝食を共にしたり、ほかの地域の子どもたちと交流することの意義は大きい。自然の暖かさと厳しさを体験できよう。とはいえ、そこでも、今の子どもスポーツがかかえる問題が、そのまま残る。大人指導・管理のもとでの自然との「向かい合い」だからである。何度もいうが、「活動する主体としての身体」の要件は、「自分で」、「自分の身体で」、つまり、自分の意志で、能動的に、という自由を前提としているからである。自然との「向かい合い」は、基本的には、もっと日常的なものでなければならない。

ところで、今の子どもたちは自然を「避ける」「いやがる」のだという意見もある。子どもの求める楽しさ・面白さが、変わってきたのだという見方もある。社会の在りようが変われば、子どもの興味・関心も変わると考えるのは、もっともなことかもしれない。しかし、速断は避けよう。学校から塾まで、勉強、勉強と子どもを追い立て、残った時間はスポーツ教室へ。そして、さあ遊ぼう、自然が大切だ、といっても、それは無理というものだろう。気晴らし的なゲームや自分だけの世界に閉じこもりたくなるのも、当然である。スポーツや遊びや自然を子どもの世界に取り戻すためには、もっともっと子どもの生活

を「ゆとり」のあるものにしなければならない。そしてこの「ゆとり」とは、単に時間的な意味にとどまらず、自分の意志で、自分の身体で、能動的に行動するという内実的な「ゆとり」をも意味している。子どもの「自然ばなれ」にはそれなりの理由があるといえる。

なるほど、今すぐ子どもと自然との「向かい合い」を日常的にすることはむずかしいだろう。当分は大人と一緒に自然を楽しむことが必要だろう。自然を楽しむこと、その「向かい合い」方を教えることも必要だろう。その際、子どもの「活動する主体としての身体」を生かす視点をおさえておれば、おのずと子どもたちは、自然と向かい合う方法を身につけるだろう。付言すれば、このことはすぐれて大人自身の問題でもある。

今の子どもにくらべて、はるかに恵まれた自然との「向かい合い」の中で育ってきたわたしたちが、自然を守り、自然と向かい合う方法を子どもたちに伝えることは、わたしたちの重い責任である。自然は、単に疲れを癒したり、気晴らしのためにだけあるのではない。もっと積極的に人間を生かし育てる、人間のよりよい生と発達の基盤でもあるはずである。

結びにかえて ——遊びを主導的活動に——

スポーツと遊びと塾は、子どもの生活世界を解くキーワードであるが、問題はこれらを「と」でつないでいかなければならない現実である。さらに、すべてを「と」でつなぎ生活を多元化するほど、子どもの生活が歪んだものになるところにある。子どもの存在形式は「全一的に」生きることであるからである。逆にいえば、多元的な生活が「全一的に」生きることをむずかしくしているのである。もっと平易に言えば、塾に行くためには、たとえそれが15分間であっても、子どもは友だちと遊ぶのをやめたり、遊びを中途半端でやめたりすることになるのである。子どもは、スポーツや塾を「と」でつないで生きることができるほど器用ではない。できるように見えても、それはそれらに浅くかわることによって凌いでいるにすぎない。

とすれば、子どもの生活を「と」でつなぎ多元化することをやめ、子どもた

ちが一つの文脈のなかで生きれるように、生活の一元化を援助すべきだ。つまり、遊びを子どもの主導的活動とすることが必要だ。スポーツもいい。心ゆくまで身体を動かすことも大切だ。それも主導的活動としての遊びとしてである。

ところで、この小論では、「遊び」という概念について、詳しく論ずることができなかつた。遊びといっても、その意味内容は多義にとんでいる。私は、原則として、この多義性をそのまま生かすべきだと考えている。大人の基準や視点から、遊びを望ましく健全な遊びとそうでない遊びとに区別して、「望ましい」遊びを子どもに強制するのでは、それはもう遊びではないだろう。ホイジンガのいうように、²¹⁾遊びはなにより「面白い」、そして「自由な行動」である。外からの強制としての遊びは自己矛盾である。もともと、子どもの生活世界・遊びからすべての「負」の要素を取り除こうとすること自体愚かな試みである。まず、それを含んでの子ども世界を認める必要がある。子どもも、それなりに矛盾・対立を含んだ子どもと子どもの間に成立する社会生活を営んでいるのである。それは、積極的に必要なことである。そのことが、子どもたち自身受動的であることをやめて、自分たちの力で子どもの世界をつくることを可能にするのである。

今のスポーツや遊びの多くは、結果的には、大人主導で、アンリオ的な言い方をすれば、「人間を自己自身からそらせ、『存在』からそらせる」²²⁾ものである。自分という存在から目をそらせ、訓練（スポーツ）や気晴らし（ファミコンなどの遊び）に自己を埋没させるものである。子どもに必要なのは、そのような活動ではなく、「人間が自己をつくる運動」²³⁾としての遊び（遊びとしてのスポーツ）である。

その際、重要なのは、自然との「向かい合い」という視点からのアプローチである。わたしたちは、「人間的に生きる」ことに深くかかわって「自然」がもつ意味と意義を見失ってはならない。自然とのよき「共存・共生」にしか人間・子どもの未来はないはずだ。子どもの生活、そのスポーツと遊びは、この視点からもう一度捉え直す必要がある。

注

- 1) 深谷氏は、豊富なデータ・資料にもとづいて、今の子どもの遊びの実態に鋭いメス入れている。ぜひ、『孤立化する子どもたち』(深谷昌志著、日本放送出版協会、1983年)を参照されたい。
- 2) John Dewey, *Democracy and Education*, Free Press, New York, 1966, p. 41.
- 3) 4) 武藤芳照、『小中学生の気なるスポーツ指導』草土文化、1988年、22ページ。
- 5) 山本清洋、「迫られる大人の決断—新しい子どものスポーツへの旅」『教育と医学』(第38巻11号)、慶應通信、1990年、27ページ。
- 6) 武藤芳照、前掲書、34ページ。
- 7) 東洋、「学ぶことと教えること」『教育の方法』(第1巻)岩波書店、1987年、27ページ。
- 8) 大田 堯、『教育とは何か』岩波書店、1990年、134ページ。
- 9) 武藤芳照、前掲書、34ページ。
- 10) 中嶋寛之、「発育期のスポーツ指導」『教育と医学』(第38巻第10号)、慶應通信、1990年、48ページ。
- 11) 同上論文、48～49ページ。
- 12) 山本清洋、前掲論文、30ページ。
- 13) 武藤芳照、前掲書、28ページ。
- 14) 丹羽氏は、この点について次のように適切な指摘をしている。「子どもの遊びを保障することは、子どもに対する大人の愛情の表現であり、責任である。」(丹羽劭昭「社会性の発達と遊びやスポーツ」『教育と医学』(38巻第11号)、慶應通信、1990年、45ページ)。
- 15) ヴィゴツキー、柴田義松・森岡修一訳『児童心理学講義』明治図書、1976年、45ページ。
- 16) 大田 堯、前掲書、133～134ページ。
- 17) 中村雄二郎、『哲学の現在』岩波書店、1977年、98ページ。
- 18) 同上書、122ページ。
- 19) 河合雅雄、『子どもと自然』岩波書店、1990年、231～232ページ参照。
- 20) 同上書、223ページ。
- 21) ホイジンガ、高橋英夫訳『ホモ・ルーデンス』中公文庫、1983年、19～29ページ。
- 22) ジャック・アンリオ、佐藤信夫訳『遊び—遊ぶ主体の現象学へ』白水社、1981年、160ページ。
- 23) 同上書、170ページ。